

## みとおし

# 行楽シーズンを待つ 今月の畜産物市況

—牛枝肉・豚枝肉・鶏卵・食鶏—

持ち直すか

### 牛枝肉

暖冬のため牛肉の売行不振から、1月に続いて食肉市場での業者の買いに積極性がなく、2月上旬までジリ安相場をたどった。しかし2月に入り、大阪市場ではこれまで各月2割程度も前年を上回っていた入荷が、産地の手控え等でやや減少し、中旬からは保合いをみている。しかし冷蔵庫の在庫は相変わらず多く、上物と下物との値開きがかなり大きく、ヌキ上物の動きがややよいようである。

3月の相場も2月に比べ横バイから弱含みとみられ、岡山食肉市場でのヌキ中値平均キロ当り400～410円程度、下旬から4月にかけて、行楽の消費増加から多少の持ち直しが考えられる。

期待される強含み相場

### 豚枝肉

年初めから下げ始めた豚枝肉は、1月21日大阪市場卸値でついにキロ当り400円の大台を割り、2月初旬にかけて半月の間に約100円もの急落をみた。これは業者の年末の仕入過剰に加え、暖冬による消費不振、さらに大手業者の買い控え、旧正月前の出荷急ぎや輸入豚肉の出回り見込み等悪い条件が重なったためとみられる。2月3日輸入豚肉の3月15日までの保管決定や、出荷調整や、在庫減少などで2月中旬からようやく340～345円の線で落ち着き、その後強含みに推移している。2月末までに入った輸入豚肉は3,700トンとかなりの量であるが、これを市場に放出する場合品質差から20%程度の価格差が必要といわれ、国内価格380～390円(皮ハギ)でなければ引き合わないと思われるので、今後3月に入ってもこれ以上の下げはなく、強含みの相場が期待されるのではないかとみられる。これは2月の安値の反動や産地での生産の回復がその後も余り進んでおらず、大阪市場への入荷も昨年にくらべ、このところ2～3割方も少ないからである。しかし3月からは昨年の秋子の肉豚がぼつぼつ出回りはじめるので、大きな値上りは望めないものと思われる。

高値相場訂正からジリ安か

### 鶏卵

昨年春の高値に比べ、1月中旬まで低迷を続けた鶏卵相場は、寒波襲来を期に下旬からやや反発に転じ、2月中旬にかけて大阪市場一級品(荷受買相場、1kg当り)200円台を突破し、2月19日には207円と2月相場として異常の高値をつけた。このところ2月下旬までの入荷の伸びも、大阪市場で1日の入荷量130～160トンと思ったほどでなく、東京高のサヤ寄せなどもあり高水準を続けたわけである。また寒暖の気温の波や、旧正月などが入荷の増減にひびき、業者の高値警戒がさらに高値を呼ぶなどのこともあって価格はやや不安定な動きをみせた。

3月の相場は例年産卵の上昇とともに、2月に比べキロ当り20円程度下回るジリ安の経過をたどる。したがってこの先3月の予想としては、2月の高値相場訂正から、上旬180円がらみ、中旬にかけてさらに10～15円程度下回り4月に入るのではないかとみられる。3月はマヨネーズ向けの大口需要も最盛期に入るとみられ、一般消費も下旬から4月にかけての行楽用や、野菜の安値見込みなどから、かなり伸びることが予想される。しかし一方鶏卵生産は、成鶏メス羽数の増加から約2割増と見込まれるので、昨年の好相場よりはかなり下回るものとみられる。

横バイか

### 食鶏

現在、例年よりキロ当り30～40円安である。飼料が上っているので、採算は合っていないのではあるまいか。これは、いまは家庭用、業務用ともに売れゆきの悪い時期であり、昨年3千トンの輸入ものの残りが投げ売りされている、生産が従来ペース(年間3割増)以上に増えていることによるものである。しかし、これだけ下がればもう底で、3月は悪くて横バイか、少しは持ち直すと考えられる。4～5月は例年安いが、そろそろオリンピック用の冷凍貯蔵が始まるので、そうはさがらないであろう。